

佛 教 藝 術 二 六 二 号 拔 刷  
(平成十四年五月)



口絵1 六臂観音菩薩坐像 クルキハール出土 パトナー博物館



口絵2 四臂観音菩薩立像 オリッサのラトナギリ遺跡出土

# インドの不空羅索観音像

森 雅 秀

## はじめに

不空羅索観音は代表的な変化観音のひとつである。不空羅索の呪の功徳を説く経典が六世紀末には漢訳されていることから、すでにそれまでにはインドにおいてその信仰が確立していたことが知られる。中国や日本のみならず、チベットやネパール、さらには東南アジアにおいても、不空羅索観音の作例が遺されている。大乘仏教の伝統を受け継いだ地域のほとんどで、この尊格が信奉されていたことがわかる。わが国においても東大寺法華堂の八臂立像や、興福寺南円堂の六臂坐像のような貴重な作例が伝えられている。

わが国の不空羅索観音については、おもに仏教美術史の立場からすでに相当の研究の蓄積があるが、その起源となるインドについては不明な点が多い。その理由のひとつは、文献に見られる不空羅索観音の尊容がきわめて多岐にわたることである。文献間で持物や面数、臂数が一致しないばかりか、『不空羅索神変真言経』(以下『神変真言経』)のような大部な経典では、尊容の異なる不空羅索観音が

一〇種類以上説かれている。図像学では一般に作例の典拠を文献に求める。しかし、不空羅索観音の場合、文献を根拠にして、現存する作例を同定することが困難なのである。これは、『神変真言経』に依拠し、八臂像が一般的なわが国の不空羅索観音とは、大きく様相が異なる。後述するように、このような尊容の観音の作例はインドには現存しない。

インドにおいても、獅子吼観音、六字観音、青頸観音のように、特徴的な尊容をもち、それが『サータナ・マラー』(Satanahala)のようなサンスクリット文献にもよく合致した観音があるが、不空羅索観音をそれらと同様にあつかうことはできない。また准胝観音や馬頭観音のように、インドでは観音ではなく、女尊や忿怒尊として信仰された尊格とも、不空羅索は区別されなければならない。インドにおいて不空羅索はきわめてあつかいにくい変化観音なのである。

もっとも、インドの不空羅索観音に関する研究が、これまでまったくなかったわけではない。清水乞、頼富本宏、田中公明、宮治昭、佐久間留理子などの諸氏の研究において、インドの特定の観音像が

不空羂索である可能性が指摘されている。筆者自身もオリッサ地方の観音について、不空羂索観音の同定を試みたことがある。また近年『神変真言経』のサンスクリット写本が中国で発見され、經典を中心とした研究が進められている。本稿では、これらの先行研究をふまえた上で、インドの不空羂索観音について、あらたな視点からの考察を行いたい。

## 一名 称

「不空羂索」の原語はサンスクリットの *amoghapāśa* である。この語は *a-mogha* (不空) と *pāśa* (羂索) という二つから構成される。前半の *a-mogha* は「迷乱する、誤る」という意味の動詞 *muh* の派生語 *mogha* に、否定を表す接頭辞 *a* が加えられてでき、「誤ることのない、確実な」という形容詞となる。*muh* からは *moha* という名詞も作られ、これは「痴」に相当する語であるが、*amogha* の場合、このような否定的な語感はない。*amogha* は名詞としても用いられ、ヒンドゥー教の至高神であるシヴァやヴィシュヌあるいはスカンダの異名ともなる。また、チベット語では「利益ある」(*don yod*) と訳され、ここでもネガティブな意味は与えられていない。

一方の *pāśa* は「縛り付ける、固定する」を意味する動詞 *pas* から作った語で、しっかり固定するための縄などを表す。本来、こ

の語と密接な関係を有している神格は、ヴェーダの重要な神ヴァルナである。司法の神であるヴァルナは、罪人を見つけ出すや、手にした素縄 (*pāśa*) すなわち羂索によってたちまちのうちに縛り上げ、懲罰を与えるという。羂索は司直のシンボルなのである。ヴァルナはヒンドゥー教においては、西方の守護神にまで地位を低下させるが、そこでも羂索はアトリビュートとして保持されている。わが国でもヴァルナは十二天の中の水天として伝わり、羂索を持った姿で描かれる。なお、ヒンドゥー教ではヴァルナのほかに冥界の王ヤマが羂索を持つことがあるが、この神も死者の生前の行いを裁く神で、もう一方の手に持った杖で懲罰を与える。

「不空羂索」という尊名については、十三世紀の醍醐寺の学僧教舜による『秘鈔口決』の「第十五 不空羂索法」の説明が紹介されることが多い。それによれば、羂索が菩薩の慈悲を表し、獵師が獲物を余さずとらえる網や縄に喩え、この菩薩の羂索が衆生を救済することにより「空しからざる」すなわち不空であるという。この比喩や語義釈は、インドの文献や漢訳經典には含まれないため、尊名の由来としてその信憑性や起源は不明である。*pāśa* に漁撈の網や狩猟の投げ縄の意味は見いだされず、漢訳の名称である「不空羂索」から導き出された後世の教理的な解釈である可能性が高い。サンスクリットの *Amoghapāśa* という名称からは「固定するのに」確実な素縄を有する者」というのが最も素直な理解であり、これにシヴァやヴィシュヌの異名としての *amogha* と、懲罰権のシンボルであ

る paśa のイメージが重ね合わされていると考えられる。

## 二文 献

不空羼索観音を説く主な漢訳經典に、以下の九種がある。

- ① 『不空羼索呪経』隋・闍那崛多訳。五八七年。大正蔵一〇九三番。
- ② 『不空羼索神呪心経』唐・玄奘訳。六五九年。大正蔵一〇九四番。
- ③ 『不空羼索呪心経』唐・菩提流志訳。六九三年。大正蔵一〇九五番。
- ④ 『不空羼索陀羅尼経』唐・北天竺婆羅門大首領・李無諂訳。七〇〇年。大正蔵一〇九六番。
- ⑤ 『不空羼索陀羅尼自在王呪経』唐・宝思惟訳。六九三〜七〇六年。大正蔵一〇九七番。
- ⑥ 『不空羼索神變真言経』(『神變真言経』)唐・菩提流志訳。七〇九年頃。大正蔵一〇九二番。
- ⑦ 『不空羼索陀羅尼儀軌経』唐・阿目佉訳。七四六〜七七四年。大正蔵一〇九八番。
- ⑧ 『不空羼索毘盧遮那仏大灌頂光真言経』唐・不空訳。七〇五〜七七四年。大正蔵一〇〇二番。
- ⑨ 『聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼経』北宋・施護等訳。大正

## 蔵一〇九九番。

このうち①と②、③と④はそれぞれ同本異訳の関係にあり、さらに⑦は⑥の『神變真言経』の巻頭部分の別訳に相当する。

これらの經典の中で最も大部で、しかもインド審教史上、重要な位置を占めるのが、八世紀初頭に菩提流志によって訳された⑥の『神變真言経』である。全体は七八品からなり、膨大な数の印、呪、真言、作壇法、画像法、供養法などが説かれている。先述のように、本経のサンスクリット写本が中国から発見され、わが国の大正大学総合仏教研究所を中心とした研究グループによって研究が進められている。すでに写本の影印版が刊行され、現在、校訂作業の段階にある。そのため準備作業として、写本の翻字テキストが部分的に公表されている。また、經典の内容に関する研究としても、本経所説のマンダラや不空羼索観音の尊容などについての考察が、いくつかが発表されている。豊富な情報を含む經典だけに、その成果が期待される。

サンスクリット原典の発見とその研究によって、經典の成立そのものにもあらたな問題が生じた。従来、この經典は漢訳とチベット訳との間で内容がかなり異なり、漢訳に比べチベット訳が簡略な傾向にあることが指摘されてきた。サンスクリット原典とこれらを比べると、チベット訳が原典にきわめて近いことがわかった。そして、漢訳がこれよりも増広された内容をもつのは、漢訳者の菩提流志が翻訳に用いた原典が、現在の写本よりも発展した形態をもっていた

のではなく、菩提流志自身が内容を膨らませて「創作」していた可能性が指摘されているのである。<sup>(注10)</sup>

『神変真言経』では一一カ所において不空羅索観音の尊容が説かれ、さらにこれに類似した尊名である「不空王観世音菩薩」「不空広大明王観世音菩薩」「不空大可長明王観世音菩薩」などの尊名を含めると、その数は二〇カ所近くにはなる。いずれにおいても、作壇法や画像法のように尊像を制作したり描いたりするための情報として登場する。これらに見られる不空羅索観音などの特徴はきわめて多様である。<sup>(注11)</sup>面数と臂数だけを取り上げても、三面二臂、三面六臂、一面四臂、一面十八臂、十一面三十二臂などがある。坐勢は結跏趺坐をとることが多いが、半跏趺坐も現れるほか、具体的な坐勢を説かないものもある。臂数がさまざまであることに応じて、持物も一定しない。尊名に含まれる羅索や、観音の第一のアトリビュートである蓮華は、ほぼ共通して含まれるが、羅索が現れない場合もある。さらに瓶、数珠、鉤、幢などが加えられたり、印相として施無畏、合掌、あるいは「揚掌」というしぐさも現れる。仏教の尊格の持物としては特殊な三叉戟がしばしば含まれることも注目される。このほか、阿弥陀の化仏を頭前に付けることは共通して見られ、額に三眼を付けること、左肩から鹿皮をかけることに言及する箇所もある。

『神変真言経』以外の經典では、不空羅索観音の尊容について、以下のような記述が見られる。

(一) 大自在天のような姿をする。頭髮は螺髪で華冠を戴く。左

肩から黒鹿皮をかけ、種々の瓔珞を付ける(①②③④)。

(二) 三眼で身色は黄白色。黒鹿皮を付ける。四臂をもち、左上の手は蓮華、左下は水瓶(澡灌)、右上は数珠を持ち、右下は施無畏印を示す。蓮華の上に立ち、天妙衣やさまざまな装身具を身につける。頂上には阿弥陀の化仏をおく(④⑤)。

(三) 頭に天冠を戴き、紺色の髪は垂下する。あらゆる装身具で飾り、頭上には阿弥陀の化仏をおく。四臂のうち、左上の手は蓮華瓶、左下は施無畏印、右上は数珠、右下は施無畏印を示す。<sup>(注12)</sup>胸の前には卍字を記す。蓮華の台座の上に立つ(④⑤)。

このうち(一)では臂数や持物について説かない。(二)(三)はいずれも四臂であるが、持物は共通しない上に、いずれも尊名に含まれる羅索が現れない。黒鹿皮を左肩からかけること、阿弥陀の化仏を戴くこと、衣装や装身具で豪華に荘嚴されることなどは一致している。

これらの經典の記述は、いずれも白い布などに観音の姿を描く方法として登場する。描いた画像に対する供養法がこれらに続いて説かれ、呪や真言と合わせて、不空羅索観音の実践法が全体で説明される。身色が黄白色で、髪は紺色というように色が指定されていることから、彩色画であることも予想されるが、それ以外の細部の説明がないことから、白描画の一部に彩色をほどこしただけであったかもしれない。いずれにせよ、実際に尊像すなわちアイコンとして制作することを前提として、尊容が説明されている点には注意が必要

である。これは『神変真言経』においても、不空羅素観音やその他の観音たちが、作壇法や画像法の中で説明されていることと共通する。

### 三 パーラ朝期の観音の地域性

パーラ朝期の観音は地域間でかなりの差異がある。この時代、密教の尊像が大量に制作されたのは、パーラ朝の版図であった。ベンガル、ビハール地方と、その南に位置するオリッサ地方の二つの地域にほぼ限られる。カシミール地方や南インドからも若干の作例が報告されているが、ここでは取り上げない。ベンガル、ビハール地方とオリッサ地方とは、共通の尊格を表しながらも、様式、モチーフ、素材などで、相違点も認められることが多い。観音の場合もその例外ではない。

表1 パーラ朝期の観音作例数

	パーラ	オリッサ
二臂坐像	79	21
二臂立像	38	11
四臂坐像	3	16
四臂立像	19	15
六臂坐像	5	0
六臂立像	12	1
十二臂像	4	0
計	160	64

これら両地域からの観音の作例数は、断片や奉獻小塔の作例を除き、およそ二八〇例を確認できる。この数は同時代の他の菩薩と比べ、突出している。これに並ぶ作例数は、如来像（おそらくその大半は釈迦）に見られる程

度で、当時の仏教徒がいかに観音に対して篤い信仰を有していたかが知られる。約二八〇例のうち約二〇〇例がパーラ朝のもの（ポスト・グプタ期を含む）で、残りの約八〇例がオリッサからである。絶対数の違いは、両地域からの仏教尊像の出土数にほぼ比例する。

これらの観音像から、密教系の変化観音である獅子吼観音、六字観音、青頸観音、金剛法を除くと、二三〇例程度となる。これらの変化観音は、文献に根拠のある明確な図像上の特徴を有し、他の観音から区別することができる。残った約二三〇例を、臂数、立像・坐像の別にしたがって、地域ごとに示すと表1のようなになる。なお、ターラーなどの四尊の脇侍を伴い、光背上部に五仏を配した観音（図1）は、カサルパナ観音という密教系の変化観音に比定されることがあるが、ここでは変化観音とはあつかわず、表に含めた。

この表からは次のような点を読みとることができる。パーラ朝の



図1 二臂観音立像 ボードガヤ博物館



版図であったベンガルとビハールからは二臂の作品がきわめて多く、七割以上を占め、さらにそのうちの約三分の二が坐像である(圖2)。四臂以上の多臂像は四臂に二二例、六臂に一七例を数えるが、八臂と十臂は作例を見いだせず、次は十二臂の四例となる。十二臂を超える多臂像も現存しない。立像と坐像の割合は、多臂像になると二臂像とは逆転して、立像が圧倒的多数を占める。十二臂像ではすべて立像である。日本の不空羅素観音が、『神変真言経』を典拠とした八臂像で一般に表されることと比べて、八臂像が残されていない点はとくに注目される。

一方、オリッサから出土した観音は、二臂像が三二例、四臂像が三一例とほぼ同数を占めている。しかも六臂以上の作例が、六臂の立像の一例を数えるのみであることから、<sup>(注1)</sup>観音の作例全体に四臂像が占める割合が、パーラ朝に比べてかなり高いことがわかる。立像



図2 二臂観音坐像 インド博物館

と坐像の割合は、二臂像の場合、パーラ朝と同様に坐像が立像の二倍程度となるが、四臂像ではほぼ同じである。ただし、四臂像についてさらにくわしく見ると、立像がいずれも二メートル近い像高をもった、水準の高い作品であるのに対し、坐像は小品が多く、技術的に立像と同レベルにあるのは二、三例にすぎない。さらに注目されるのは、このような四臂の観音立像の何例かが、絹索を持物として持つことである。オリッサの中でも特別な位置を占める四臂の観音立像については、次節でくわしく取り上げる。

持物は二臂像の場合、右手で与願印を示し、左手に蓮華を持つ。坐像の場合、右足を垂下させて踏割蓮華に置く遊戯坐をとることが多く、その場合、左手は左足の後ろの台座に置き、そこから蓮華の茎が上に伸びる。パーラ朝の四臂像、およびオリッサの四臂坐像では、与願印と蓮華に加え、数珠と水瓶を持つことが圧倒的に多い(圖3)。これらの持物は、ヒンドゥー教のブラフマー、あるいはポ



図3 四臂観音立像 ナーランダ博物館

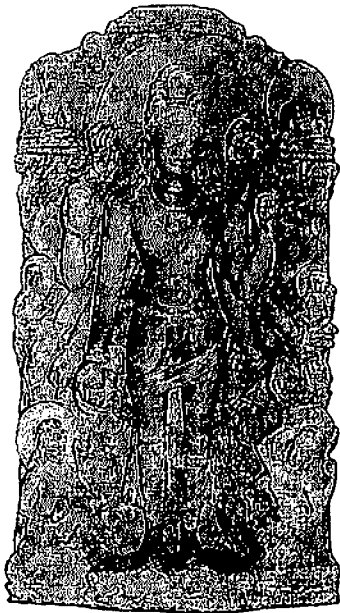


図5 十二臂観音立像 ナーラン  
ダー博物館



図4 六臂観音坐像 インド博物館

ストログプタ期の弥勒の持物が導入された可能性が指摘されている。<sup>(註)</sup>  
 パーラ朝の六臂像は、これらに梵匳と施無畏印が加えられることが一般的であるが、絹索もいくつかの作例で認められる(口絵1・図4)。一例のみ三叉戟があることが報告されているが、出版されている図版からは確認できない。<sup>(註)</sup> また、六臂像の場合、一部の腕が欠損していることが多いため、持物全体を把握することは困難であ



図6 四臂観音立像 ラトナギリ遺跡

オリッサの観音像の中でとくに注目される四臂の立像は、断片を除き、これまで一四例確認されている(口絵2・図6・12・表2〔六三頁〕)。これらはいずれも等身大あるいはそれ以上の像高をもった作品で、この地域を代表する尊像彫刻として、しばしば紹介されて

#### 四 オリッサの四臂観音立像

る。オリッサからの唯一の六臂像は、全体が摩滅していて、持物はすべて不明である。十二臂像のうち、保存状態も良好で、作品としても水準の高いナーランダー博物館の立像(図5・表3〔六四頁〕作例6)では、持物と印相は与願印、宝を示す与願印、与願印、数珠、施無畏印、施無畏印(以上右手の下から)、蓮華、梵匳、蓮華、絹索、果実を示す与願印、水瓶(以上左手の上から)となっている。

きた。出土地はラトナギリとウダヤギリの各遺跡で、カタック地区内のもう一つの重要な遺跡ラリタギリからの出土はない。ラトナギリとウダヤギリの出土品の傾向がよく似ていることと、ラリタギリのそれが独自であることは、四臂観音立像以外でも広く認められる。<sup>1)</sup>

一四例の四臂観音立像には、いくつかの共通した特徴がある。コ



図7 四臂観音立像 ラトナギリ遺跡



図8 同 頭部

ンダライト石に高浮雕で表され、蓮台の上に立っている。やや形式化は見られるものの、人体表現は写実的で、的確なプロポーシオンをもつ。堂々とした体軀とすらりと伸びた長い手足をもち、四臂のうち、後ろの一組の手は、肘を曲げて上に向けている。髪型は髪髻冠で、太く表現された頭髮の筋が、シンメトリカルに左右にまとめられ、房状になった髪が肩に垂下する。ややくぼんだ眼窩に伏し目がちの瞑想的なまなざしをもち、広い額、引き締まった口元といった特徴的な表情を示す(図8)。頭前には化仏が置かれるものも多いが、装飾的な冠帯のみの作品もある。一部の作品には額の中央に第三の眼が垂直に刻まれている。長い耳朶には耳飾りをつけ、璽珞臂釧、腕釧、腰帯など、いずれも手の込んだ豪華な装身具を飾る。左肩から斜めにかけてられた聖紐も連珠を帯状にした華やかなものである。

右前手は下に垂らして与願印を示し、左前手は蓮華を持つ。屈臂した右後手は数珠を、左後手は水瓶を持つことが多いが、右手の数珠にあわせて、いくつかの作品では網索を持つ。ラトナギリの一例では、左後手の水瓶にかわって網索を持ち(図7・表2作例4)、別の一例では左前手を脇侍の男性忿怒尊の頭に載せる(図9・20・表2作例6)。その他、特徴的な持物としては、ウダヤギリ出土でバーナー博物館の前庭に展示されている作例が、蛇のからみついた三叉戟を左後手で持っている(図10・表2作例10)。三叉戟は『神変真言経』でしばしば不空羅索観音の持物として言及されるため、これま



図10 四臂観音立像 パトナー博物館



図9 四臂観音立像 ラトナギリ遺跡

でも注目されてきたが、経典中の記述には蛇は言及されていない。類似の持物は、密教系の変化観音のひとつである獅子吼観音の作例にも登場する。

光背に複数の眷属を伴うことも広く見られる。蓮華を開くしぐさ



図11 四臂観音立像 ウダヤギリ遺跡

をするターラーと、二臂あるいは四臂で忿怒形をとる馬頭が多く見られ、さらに結跏趺坐で坐るブリクティの姿もしばしば現れる。ウダヤギリにある作例(図11・表2作例11)では、さらに合掌する女性像が表されているが、これも観音の眷属であるシュヴェター、もしくはパドマスンダリニーと考えられる。この作品については、かつて詳細な検討を行ったことがあるが、光背全体に山岳表現をほどこした「補陀洛山上の観音像」にも比定できる。作品の上部には、補陀洛山中の苦行者たちの姿も小さく表されている<sup>(注18)</sup>。

このほか、一部の作品では中央の観音や眷属尊たちの乗る蓮華と同じ根から枝分かれた蓮華が、光背の上にまで高く伸び、そこに仏坐像あるいは女尊坐像を表す。また、光背上部に七尊もしくは九尊の仏坐像を横一列に並べた作品が三例ある(表2作例10・12)。各尊の比定は困難であるが、一例(図12・表2作例12)では中央の仏坐



図12 四臂観音立像 ウダヤギリ遺跡

像が転法輪印を示し、さらにその台座に法輪と二頭の鹿があることから、釈迦と見て間違いないであろう。

これらの特徴の中で、不空羅索観音との関係でとくに注目されるのは、多くの作品に見られた羅索である。一例(表2作例4)を除きいずれも右後手に、数珠とともに持っている。逆に、羅索を除けば、与願印、蓮華、数珠、水瓶の持物の組み合わせは、パーラ朝の多くの四臂観音とまったく同じである。四臂の観音で羅索を持った作例が、ベンガルやビハールからは一例も報告されていないことと著しい対比を示すのである。經典の記述との関係では、パトナー博物館の作例の三叉戟も注目されるが、この観音像は羅索を持っていない。また、黒鹿皮をまとうことも文献には広く見られ、パーラ朝の観音では実際の作例(図4)にも現れたが、オリッサの四臂観音立像で鹿皮が表されたものはない。

## 五 羅索を持つ尊格

オリッサの四臂観音像に特徴的に見られた羅索は、この時代の他の尊格たちの持物としても現れる。ただし、その数は蓮華やウトパラなどの持物よりも表される頻度は低く、しかも、これを手にするのは特定の尊格に限定される。

パーラ朝期の尊格の中で、羅索を手にする作例をまとめると表3のようになる。主尊以外にも、主尊の横に脇侍として表される尊格の中に、羅索を持つ尊の例もあるため、これを表4(六七頁)に示した。

主尊のうち、観音に関しては、パーラ朝の六臂像に四例、十二臂像に二例確認できる。いずれも多臂像であるが、左手のひとつに羅索を持つ。パーラ朝の版図からは羅索を持った四臂の観音の出土がないことは、すでに述べたとおりである。二臂の観音で羅索を持つ例は、パーラ、オリッサいずれにおいても知られていない。また、観音以外の菩薩で羅索を持つ尊格も見当たらない。

観音以外で羅索を持つのは、女尊と忿怒尊に二分される。女尊ではマリーチー(図13)の作例が多いが、これはこの時代のマリーチーの作例総数がかなりにのぼるためである。三面六臂、もしくは三面八臂をとる。羅索の持ち方は、左の第一手を胸に当てて人差し指を伸ばし、同じ手で羅索の下の端を握るか、あるいは、身体の

横に伸ばした左手のひとつで、単純に握るかのいずれかである。前者は文献では「羅素を伴った期剋印」(sahasranani)と呼ばれる。チュンダーも多臂の女尊で、しかもその臂数が一定しないが、十



図13 マーリーチャー像 インド博物館



図14 チュンダー像 パトナー博物館

二臂と十八臂の作例でひとつずつ、羅素を持つ例が確認できる(図14)。大随求(Mahapraisara)は五守護(Pancaraka)と呼ばれるグループの一尊で、やはり多臂の中の左の一臂で羅素を持つ。以上の三種の女尊は、いずれも初期密教で人気の高かった陀羅尼の女尊であるという共通点がある。

これに対し、ドゥルゴーターリニー・ターラー(図15)と金剛ターラーは、パララ朝期できわめて作例の多いターラーの中で、密教化された特殊なターラーである。いずれも多臂であるが、金剛ターラーは右手に羅素を持つ。表3と表4で示した尊格の中で、右手で羅素を持つのはこの金剛ターラーのみである。

忿怒尊のグループでは不動、ヤマーンタカ、降三世、サンヴァラ(図16)があげられる。不動が右手に剣、左手に羅素を持つのは、わが国でも一般的であるが、インドからは不動の作例そのものがきわめて乏しい。残りの三尊は多面多臂の姿をもち、左手の持物のひ

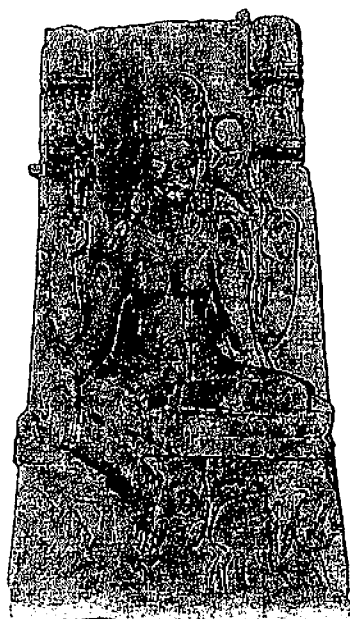


図15 ドゥルゴーターリニー・ターラー像 インド博物館



図17 弥勒像 インド博物館



図16 サンヴァラ像 パトナー博物館

とつとして絹索を持つ。ヤマーンタカが絹索を持つのは、この尊と密接な関係をもつヒンドゥー教の神ヤマが、絹索をアトリビュートのひとつとすることに由来するのであろう。

一方、脇侍に関しては、ターラーの左脇侍に五例あるほかは、主



図19 二臂観音坐像 ナーランダール博物館



図18 金剛手左脇侍の四臂忿怒尊像  
ラトナギリ遺跡

尊に特定の傾向は認められない。仏、文殊、弥勒(図17)、金剛手(図18)、二臂観音(図19)、四臂観音(図20)の左脇侍に、それぞれ一例ずつ現れる。出土地にも特定のかたよりはなない。絹索を持つ脇侍たちはいずれも忿怒形をとり、観音やターラーの



図20 四臂観音立像(図9)部分  
四臂忿怒尊像 ナーランダ  
一博物館

場合、馬頭であった可能性が高い。ただし、ターラーの脇侍は一例を除きすべて女尊で、その名称は明らかではない。<sup>(注20)</sup>また、弥勒は両脇侍とも女尊で、他に類例のない特殊な組み合わせである。文殊の脇侍は六面六臂をそなえたヤマインタカである。また、四臂を有するものが三例あり、いずれの場合も、上にあげた左後手に絹索を持つ。二臂の場合、左手に絹索を持つことはこれまでと同様である。

絹索を持つこれらの尊格が、ほとんどの作例で左脇侍として現れることも、絹索を持つ手が左であることと関連するかもしれない。絹索はそれを持つ尊格の左肩近くの光背に表されることが多い。右脇侍として絹索を持つ尊を配置した場合、主尊との間に絹索を表すだけの十分な空間が確保できない。ただし、脇侍に忿怒形の尊格を置いた作例を見ると、絹索の有無にかかわらず、左脇侍となることが圧倒的に多いことも、その理由と見るべきかもしれない。

日本でも不空絹索観音や不動明王が絹索を持つ場合、ほとんどがその左手に持つ。ただし、その形態はインドのものとは異なり、両端に金属製の環などを付けた長い索縄で、これを幾重にも束ねて手にすることが多い。一方、インドでは先端を丸くした太いロープ状の形をとり、その下端を左手に持つ。丸い部分は上方に伸び、空中に浮かんでいるように表される。胸の前で期剋印を示しながら持つ場合も、先端の丸い部分は身体の横にまで伸びている。同じ絹索であっても、日本とインドとはその表現はかなり異なるのである。

インドの絹索(バーシャ)が、本来懲罰を与える神の特徴であったことはすでに述べたが、『マハーバータ』などの叙事詩には、武器としての絹索の用例がある。<sup>(注21)</sup>ここでは、戦場の場面で敵に向かって投げつけられる「ナーガの絹索」(naga-dana)は、敵の体、とくにその足を固定する武器であったらしい。ちょうど蛇が自分の身体を巻き付けて獲物を身動きさせないように、絹索が機能する。単なる投げ縄ではなく、特殊な力をもった魔術的な武器なのである。

このナーガの絹索を手にする戦士は、剣や弓矢のような一般的な武器も同時に持っているが、それは利き手の右手で保持されたであろう。仏教の尊格たちが武器のひとつとして絹索を左手に持ち、右手には別の武器を持っていたのはこのためと考えられる。不動は右手に剣を持ち、馬頭も剣や斧を右手に持つ。多くの忿怒尊たちは、絹索以外にも金剛杵や弓矢、剣などで武装していた。絹索は剣などと比べ、明らかに補助的な武器であり、左手に保持されるのが表現



上、適当と考えられたのであろう。

なお、ナーガの網索という武器は、ヴァルナの持物などとして仏教文献にも頻繁に現れ、そのイメージは仏教徒によっても共有されていたと考えられる。また、密教の忿怒尊たちはしばしば身体にナーガを装飾品のように巻き付けて表される<sup>(注2)</sup>。これはグロテスクな表現と見るよりも、ナーガの網索がもつ魔術的な力を、忿怒尊がコントロールできることを示すのであろう。主尊で網索を持つ尊格のなりを忿怒尊が占め、脇侍では例外なく忿怒尊だったのは、網索のこのような力を身につけていたからと考えられる。

それでは、なぜオリッサの四臂観音立像のみは、一例を除きすべて右手で網索を持っていたのであろう。ここでも造形上の理由がそのひとつにあげられるかもしれない。四臂像で網索を持つべき左手の近くには、すでに蓮華が表されている。茎が下に伸び、円形の満開の花を咲かせた蓮華は、形態的に網索にきわめて近い。これに隣接させてさらに網索を置くよりも、数珠を持った右後手に持たせる方が、画面構成が容易であるし、作品全体のバランスも優れている。

しかし、いずれにせよ、本来左手に持つべき網索が右手に置かれているのは、図像の伝統からは逸脱している。さらに、剣のような武器ではなく、数珠や水瓶などともに現れるのは、武器としての網索が有していた機能が、すでに失われていると見てよいであろう。このことは、一般に単独で保持される網索が、数珠とともにひとつ

の手に握られていることにも関連する。数珠を持ちながら同じ手に網索を握る例は、オリッサの四臂観音像以外にはまったく現れない。聖職者や行者と結びついた数珠のような持物を持ちながら網索をあやつることは、武器として網索をとらえているものには想像もできないであろう。

網索を持つ六臂や十二臂の観音たちも、同じ手ではないが数珠や水瓶を持っていた。その点では彼らの持っていた網索にも武器としての性格はすでに認められないかもしれない。しかし、左手に単独で持つという網索の表現はここでも保持されている。図像上は同じ網索であっても、左右いずれの手に持つかで、網索がもつ意味は異なるのである。

それでは、不自然な形であっても、四臂の観音立像にあえて網索を持たせたのはなぜだろう。図像成立の背景となる当時の仏教を視野に入れて、その理由を考えてみよう。

## 六 実践とイコン

不空網索観音を説く経典が、いずれもこの尊格の呪を説き、しかも画像の描き方として尊容を説明していたことはすでに指摘した。とくに『神変真言経』以外の経典は、いずれも不空網索の呪の効能などを説いた密呪経典や陀羅尼経典であった<sup>(注3)</sup>。その中では、画像の不空網索は「大自在天の如し」というようなあいまいな表現で示さ

れ、持物を明記する場合にも綱索は登場しなかった。それに対し、格段に整備された内容をもつ『神変真言経』では、何種類もの不空綱索が説かれているが、その多くは綱索を持物の一部として持つ。そして、それに呼応するかのよう「大自在天の如し」というようなあいまいな表現も姿を消す。

不空綱索にかかわらず、呪の効能を説く經典には、呪を用いた実践法と、呪と結びついた尊格が登場することが一般的である。しかし、これらは同時に成立したのではない。はじめに特定の呪に対する信仰があり、これを中心とした儀礼や実践が整備されていく過程で、イコンが導入されたとみるのが自然である。実際、インドでは特定のイコンを用いない宗教実践は、ヴェーダの祭式以来、現代のヒンドゥー教の儀礼にいたるまで、きわめて一般的である。礼拝や供養にイコンは必ずしも必要ないのである。

密呪や陀羅尼を説く經典が作られるのは、呪、実践法、イコンが登場したさらに後である。実践体系を文字として記録することによって、煩瑣な儀礼を正確に反復したり、他者に伝えることが可能となる。經典として編纂することで、実践法そのものの権威を高めることも期待されたであろう。いずれにせよ、經典の編纂時にはすでにイコンを含めた実践法が存在していたのであり、その逆ではなかったはずである。

不空綱索に対する信仰が、イコンというイメージをそなえたものではなく、本来、特定の呪に対するものであったことを考えると、

## 日韓古代彫刻史論

大西修也著 A五判・四四七頁／本体九〇〇〇円

広隆寺・宝冠弥勒の腰に吊り下げられた佩玉の意味。法隆寺夢殿の救世観音像はなぜ胸に宝珠様の持物を捧げているのか。天智九年に焼失したといわれる法隆寺を再建に導いた原動力とは何か。著者が三十年にわたる韓国古代彫刻の調査・研究成果をもとに飛鳥・白鳳彫刻との比較研究、東アジアにおける仏教彫刻成立の思想的背景をなす古代仏教信仰の実態と仏教図像との関係について解き明かす。カラー含む豊富な写真・図版約三三〇点収録。

- 第一部……研究序説
- 第二部……朝鮮三國期の初期仏教と仏教図像の研究
- 第三部……朝鮮三國期造像研究(各論編)
- 第四部……朝鮮三國期の造像研究(様式編)
- 第五部……日韓古代彫刻の服制研究
- 第六部……日韓古代彫刻の造像銘研究
- 第七部……止利式仏像の研究

## 日中芸能史研究

越智重明著 B五判・六八二頁／本体八八〇〇円

文献と物証の両方が丹念に検討・分析された日本・中国芸能史の基本文献。

## 図説中国古代理銅鏡史

孔祥星・劉一曼著／高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳

B五判・三〇三頁／本体八〇〇〇円／発売：海鳥社  
 齊家文化期から元代まで約四〇〇〇年の銅鏡の歴史を詳述。豊富な資料と図版。待望の復刊。

〒812-0035 福岡市博多区中興服町5-23 中国書店 <http://chshop.net> E-mail:info@chshop.net  
 電話092(27)3767 FAX092(27)2946

実践で用いられるようになったアイコンが綱索を有するかどうかはおそらく問題にならなかつたであろう。既存の自在天像や観音像を用いて実践したとしても、それを不空綱索という呪の本尊とみなせばよかつたのである。特定のアイコンがいかなる名称で呼ばれるかは、それがどのように用いられたかという文脈に左右されるのであり、絶対的なものではない。見方を変えれば、綱索という持物の有無が、不空綱索という尊名比定の根拠とはなりえないのである。

忿怒尊と並んで、陀羅尼を起源とする女尊たちが綱索を持ってしばしば表されることも注目される。陀羅尼という呪文がもつ呪術的な力は、対象を固定し懲罰を与えるという綱索本来の機能や、戦場で用いられた魔術的な武器としての綱索の役割に、きわめてなじみやすい。相手をコントロールする力が集約されているのが綱索なのである。仏教に背を向けるものたちを力ずくで改宗させる忿怒尊にも、このような力が期待されている。

ところで、密教は象徴をきわめて重視する宗教である。マントラ（真言）やムドゥラー（印）はその代表的なものであるが、尊格も特定のシンボルと結びつく。観音と蓮華、弥勒と龍華、文殊と梵篋などはそのよく知られた例である。尊格と結びついたシンボルは「三昧耶形」となって、尊格そのものを表し、マンダラでは尊形の代わりに描かれる。しかし、パーラ朝期の実際の尊像を見ると、このようなシンボルは、対応する尊格の作例にすべて等しく現れるわけではない。蓮華と観音の結びつきは安定しているが、弥勒は龍華以外

にも数珠や水瓶を持つことがあり、文殊はパーラ朝の初期ではウツパラのみを持ち、時代が下るとその上に梵篋を載せるようになる。ばらつきのある多様なイメージが、次第にひとつに収斂し、その過程で尊格に結びついたシンボルが、アトリビュートの位置を確立していったと考えられる。

このようなプロセスは、実践で用いられたアイコンにもあてはまるであろう。当初、アイコンは一定したものではなかつたし、ひとつのものである必要もなかつたが、密教における象徴重視の流れの中で、特定のシンボルが尊格と結びつき、その尊を表すトレードマークのようになった。不空綱索の場合、陀羅尼と関連をもち、しかも尊名の一部にもなっている綱索が、そのようなシンボルとみなされたであろう。

不空綱索を説く經典が、初めはあいまいな表現でこの尊格のアイコンを説明していたのに対し、『神変真言経』では、多くの場合、綱索を持つ物のひとつとしてあげるようになった背景には、このような状況が予想される。そして、オリッサの四臂観音立像が、単独で左手に持つという綱索を表現する伝統を無視してまで、持物のひとつとして右手に、すなわち最も目立つ場所に綱索を加えたことも、この持物が本来の機能や性格を失いながらも、尊格のアイデンティティを示すシンボルとして重視されたためではないだろうか。

## おわりに

インドにおいては、経典などの文献に説かれる尊格の特徴と、実際に造形された尊像とは、完全には一致しない。仏伝図や前生図のように説話的な美術の場合、文献の内容を比較的忠実に図像の中に再現することもあるが、礼拝や供養を目的とした尊像の場合、造像の伝統の中で受け継がれたモチーフやテーマが支配的になる。とくに大乘仏教の時代から信仰されてきた観音や弥勒のような菩薩たちは、独自の図像的な伝統を有し、それは経典などの文献を直接の典拠とするものではない。大乘経典にはさまざまな尊格が登場するが、その尊容に関する情報はきわめて乏しいし、含まれていたとしても、それが活用されることもまれである。たとえば『法華経』「普門品」では観音の三十三変化身が説かれるが、それがインドにおいて実際に図像表現された例はない。尊像と文献はそれぞれ自律的な伝統をもち、その一部の要素が共有されていたと見るべきである。

このような関係は大乘仏教から密教の時代になっても維持されたと考えられる。初期の密教経典の中には、すでに数多くの尊格が登場し、しかも具体的な尊容についての記述も見られるが、実際に制作された作品は、大乘仏教以来の伝統を忠実に受け継いでいることが多い。フィクションの世界である文献の内容に比べ、造像の場は

より現実的、保守的な立場を守ったともいえよう。

しかし、その一方で、成就法や観想法と呼ばれる密教独自の瞑想法を説く文献では、尊格の面数や臂数、持物にはじまり、顔の表情、身体的特徴、衣装や装身具にいたるまで、具体的なイメージが詳細に規定されている。行者が特定の尊格を瞑想(観想)するためのマニュアルであるからである。そして、実際の作例も、このような特徴を忠実に表現したものが現れる。密教の変化観音である獅子吼観音や六字観音もそのような尊格たちである。造像の場に密教文献が大きな影響を与え、また、実際の作例のもつイメージが、文献の内容にも反映されたと考えられる。

不空羅索観音は密教系の変化観音としては最も初期に位置し、しかも密教の黎明期にその形成に重要な役割を果たした陀羅尼信仰とも関連をもつ。文献と作品との関係が大きく変わろうとした過渡期に位置づけることができるであろう。経典において尊容に関する記述が多様であったのは、そのような不安定な状態を表すとも考えられる。

図像学的な伝統に反する形で羅索を手にするオリッサの四臂観音立像は、その不自然さのゆえに不空羅索観音を強く意識した作例と考えられる。しかし、それ以外の観音の作例においては、羅索の有無といった図像学的な特徴は、不空羅索観音の同定の絶対的な条件とはならないことは、すでに述べたとおりである。いかなる文脈で、たとえばどのような実践の場で用いられたかが、尊名を比定するた

めの重要な指標になるのである。しかし、それは図像学や美術史の領域を超えた問題となるであろう。

〔注〕

- 1 浅井（一九九八）および同書所収の参考文献リスト参照。
- 2 これらのインドにおける密教系の変化観音と、女尊や忿怒尊を起源とする観音については拙著（二〇〇一）第五章参照。
- 3 清水（一九七四）、頼富（一九九〇）、田中（一九九三、一九九八）、佐久間（一九九一、一九九二）、佐久間・宮治（一九九三）、佐和（一九九七）、宮治編（二〇〇一）などがある。不空羼索に関する先行研究は頼富（一九九〇）と田中（一九九八）にまとめられている。この他に Leathko（一九八五）がパラ朝の不空羼索をあつかい、本稿とも関連する。ナーランダーやクルキハールなどのビハール出土の多臂の観音像に関する考察である。
- 4 拙稿（二〇〇〇、二〇〇一）
- 5 写本は密教聖典研究会（一九九七）として刊行されている。個別の研究については後述する。
- 6 浅井（一九九八、一九九）にしたがう。頼富（一九九〇、六三五）にも類似のリストがあげられているが、『撰無礙経』（大正蔵一〇六七番）と『仏説持明蔵瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌経』（大正蔵一〇六七番）がこれに加えられる。また三種のサンスクリット文献、四種のチベット訳文献もあわせてあげられる。
- 7 木村他（一九九八）、伊藤他（一九九九）、鈴木他（二〇〇〇）、密教聖典研究会（二〇〇一）
- 8 高橋（一九九二）、野口（一九九八、二〇〇一）、前田（一九九九、二〇〇〇）、木村（二〇〇一）など。
- 9 頼富（一九九〇、八九一―一〇五）
- 10 野口（一九九八）
- 11 同経に説かれる不空羼索観音の尊容は井上（一九七九、一五一―一七）、朴（二〇〇一、一〇二）にまとめられている。
- 12 ⑤では、右と左が入れ替わっているが、異説に「左」を「右」と読むものがあり、おそらく誤記と考えられる（大正蔵第二〇卷四二八頁下）。
- 13 以下に示す観音の地域差については佐久間・宮治（一九九三、一〇八―一二）、宮治（二〇〇一、二五―三二）にも示されている。
- 14 以下の作例数は、宮治昭先生主宰の「パラ朝美術研究会」で収集した資料に、筆者自身が補足したものにもとづく。なお拙著（二〇〇一、一五六）において示した観音の作例数は、パラ朝の二臂のものに誤記がある。表1を参照されたい。
- 15 拙稿（一九九七、作例14、図26）
- 16 宮治（二〇〇一、二九）
- 17 Saraswati（一九七七、P. 71）
- 18 オリッサ州カタック地区の仏教美術については拙稿（一九九八）参照。
- 19 拙稿（二〇〇〇）。補陀洛山のモチーフをともなう観音像については拙著（二〇〇一、一四八―一五五）参照。
- 20 パーラ朝のターラーで脇侍を伴う作品については森（一九九三）参照。
- 21 Eneanu（一九八八）
- 22 拙稿（一九九〇）参照
- 23 不空羼索に対する信仰が本来、陀羅尼に対するものであったことは、田中（一九九八、八六）でも指摘されている。
- 24 パーラ朝期の弥勒と文殊の図像上の特徴については拙著（二〇〇一、一〇九―一一五、二二六―二二九）参照。

【文献】

- 浅井和春 一九九八 『不空羼索・准胝観音像』日本の美術三八二号  
至文堂
- Banerji, Rakhai Das 1933 *Eastern Indian School of Medieval Sculpture*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, XLVIII. Delhi: Manager of Publications.
- 仏教美術研究上野記念財団助成研究会 一九七九 『変化観音の成立と展開』(仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第六冊) 仏教美術研究上野記念財団助成研究会
- Emeneau, M. B. 1988 Nāgapaśā, Nāgabandha, Sarpabandha, and Related Works. In *Sanskrit Studies of M. B. Emeneau: Selected Papers*, ed. by B. A. van Nooten, Berkeley, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Donaldson, Thomas E. 1995 Orissan Images of Vāraḥi, Oḍḍiyāna Mātrīci and Related Sow-faced Goddesses. *Arthas Asia* 55(1-2): 15-182.
- Huntington, Susan L. 1984 *The "Pala-Sena" Schools of Sculpture. Studies in South Asian Culture* Vol. X. Leiden: E. J. Brill.
- Huntington, Susan L. & John C. Huntington 1990 *Leaves from the Bodhi Tree: The Art of Pala India (8th-12th centuries) and Its International Legacy*. Seattle: The Dayton Art Institute.
- 伊藤善之・古宇田亮修・松崎泰雄 一九九九 「Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśākalparāja Part II」『大正大学総合仏教研究所年報』二一・八一-一二八
- 井上正 一九七九 「変化観音の形式と作例(その一)」仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第六冊 『変化観音の成立と展開』七-一七頁
- 木村高財・大塚伸夫・杉木恒彦 一九九八 「Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśākalparāja Part I」『大正大学総合仏教研究所年報』二〇・一-五三

所年報』二〇・一-五三

- 木村秀明 二〇〇一 「『不空羼索神變真言經』「六々造立儀則品」に就かれぬ補陀洛山圖」『豊山学報』四四・一-三四
- Leoshko, J. 1985 The Appearance of Amoghapaśā in Pala Period Art. In A. K. Narain ed. *Studies in Buddhist Art of South Asia*, New Delhi, pp. 127-135.
- Leoshko, J. 1995 Pilgrimage and the Evidence of Bodhgaya's Images. In K. R. van Koij & H. van der Veere eds. *Function and Meaning in Buddhist Art: Proceedings of a Seminar Held at Leiden University 21-24 October 1991*, Groningen, Egvert Forsten, pp. 45-57.
- 前田繁 一九九九 「"Amoghapaśākalparāja" 『不空羼索神變真言經』の四観音像」『天白学報』四一・一-七
- 前田繁 二〇〇〇 「『不空羼索神變真言經』の「六々造立儀則品」について」『天白学報』四二・一-七
- Mallmann, Marie-Térèse de 1948 Un point d'iconographie Ind-Javanaise: Khasarapa et Amoghapaśā. *Arthas Asia* 11(3): 176-188.
- 密教通典研究会 一九九七 『不空羼索神變真言經梵文字写本影印版』大正大学総合仏教研究所
- 密教通典研究会 二〇〇一 「『不空羼索神變真言經』梵文字写本影印版」『天白学報』四二・一-七
- Mitra, Debala 1981 *Ratnagiri(1958-61)*. Vol. I. *Memories of the Archaeological Survey of India*, No. 80. New Delhi: Archaeological Survey of India.
- Mitra, Debala 1983 *Ratnagiri(1958-61)*. Vol. II. *Memories of the Archaeological Survey of India*, No. 80. New Delhi: Archaeological Survey of India.
- 宮治昭編 二〇〇一 『観音菩薩像の成立と展開——変化観音を中心に』インデックスから日本まで』(『シルクロード学研究』第一巻)シルクロー

下学研究センター

- 森雅秀 一九九〇 「パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』六、六九―一一一
- 森雅秀 一九九七 「オリッサ州立博物館の密教美術」『高野山大学密教文化研究所紀要』一〇、二九―七〇
- 森雅秀 一九九八 「オリッサ州カタック地区の密教美術」『国立民族学博物館研究報告』二三(二)、三五九―五三六
- 森雅秀 二〇〇〇 「オリッサ出土の四臂観音——密教図像の成立に関する一考察」『高野山大学密教文化研究所紀要別冊(密教の形成と流伝)』二、一一九―一四五
- 森雅秀 二〇〇一 『インド密教の仏たち』春秋社
- 森喜子 一九九〇―一九九二 「パーラ朝の女尊の図像的特徴(一)」(三)、『名古屋大学古川総合研究資料館報告』六、一一三―一五五、七、一五五―一九二、八、六九―一一四
- 森喜子 一九九三 「パーラ朝のターラーに関する図像的考察——三尊形式を中心として」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法蔵館 八二七―八四八頁
- 野口圭也 一九九八 「"Amoghahāśakalparāja" のマンダラ——(一) いわゆる「広大解脱マンダラ」について」『山崎泰廣教授古稀記念論文集 密教と諸文化の交流』永田文昌堂 八九―一〇四頁
- 野口圭也 二〇〇一 「"Amoghahāśakalparāja" のマンダラ——(二) 「最上広大解脱蓮華マンダラ」について」『密教学研究』三三、一九―三五
- 朴亨國 二〇〇一 「中国の変化観音について」宮治昭編『観音菩薩像の成立と展開』シルクロード学研究所センター 八九―一一五頁
- Raven, E. M. & K. R. van Kooij 1992 *Pala-Sena Stone Sculptures from the National Museum of Ethnology, Leiden. In *Indian Art and Archaeology*, ed. by E. M. Raven and K. R. van Kooij, Leiden.*

en. E. J. Brill, pp. 94-128.

Sahu, N. K. 1956 *Buddhism in Orissa*. Cutak: Utkal University.

佐久間留理子 一九九一―一九九二 「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(一)(二)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』七、

一〇九―一四八、八、九五―一一〇

佐久間留理子・宮治昭 一九九三 「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(三)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』九、一〇七―

一一九

Saraswati, S. K. 1977 *Tantrayāna Art: An Album*. Calcutta: Asiatic Society.

佐和隆研 一九九七 「オリッサにおける主要密教尊像」『佐和隆研著作集 第四卷 アジアの仏教美術』法蔵館(初出は佐和隆研編 一九八

二 『密教美術の原像』法蔵館)

佐和隆研編 一九八二 『密教美術の原像』法蔵館

清水乙 一九七四 『密教の美術』『アジア仏教史 インド編Ⅳ 密教』佼成出版社 一八七―二六〇頁

鈴木晃信・大塚信夫・木村秀明 二〇〇〇 *Transcribed Sanskrit Text of the Amoghahāśakalparāja Part III*. 『大正大学総合仏教研究所年報』二二、一―六四

高橋尚夫 一九九二 『不空羼索神變真言経』の梵本について、『印度学仏教学研究』四〇(二)、一九六―一九九

田中公明 一九九三 「インドにおける変化観音の成立と展開——いわゆる四臂観音の解釈を中心にして」『美術史』一三三、四五―五五

田中公明 一九九八 「インド・チベット・ネパールの不空羼索観音」『不空羼索・准胝観音像』日本の美術三八二号 至文堂 八六―九八頁

頼富本宏 一九九〇 『密教仏の研究』法蔵館

頼富本宏・下泉全暉 一九九四 『密教仏像図典——インドと日本のはとけたち』人文書院

表2 オリッサ州カタック地区出土の四臂観音立像

[注] 表中、フレッソンの図版表示は本稿の図版番号を示す

No.	出土地	所蔵・所在	持物	管頂尊・ チームカ	その他の特徴等	出典
1	Ratnagiri	現地	右手数珠・与願印、左手蓮華・水瓶	H スー チームカ	四臂金剛手立像と対	Saraswati 1977: Pl. 63; Mitra 1981: Pl. CIX(B); 佐和1982: 口絵8, 押図60, 7 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-S2d-M1-2; 森1998: No.248, 図80~82; 2000: 図9
2	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠と鬘索 (一部のみ残存)、左手蓮華・水瓶	TH	頭部欠損	Mitra 1983: Pl. CCCXI; 佐和1982: 押図15; 6 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-M 1-11; 1991-3: B-M1-5(重複); 森1998: No.249, 図83~85; 2000: 図10; 2001 : 図4-10 (図6)
3	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠、左手蓮華・水瓶			Mitra 1983: Pl. CCCXXVIII(A); 佐和1982: 44 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-M 1-3; 森1998: No.250
4	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠、左手蓮華・鬘索	TB	三眼	Mitra 1983: Pl. CCCXXIV(A); 佐和1982: 8 図; 須富・下泉1994: 口絵; 佐久 間1991-3: B-S2a-S2e-P5-1; 森1998: No.251, 図86~89; 2000: 図11; 2001: 図 13 (図7・8)
5	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠と鬘索、 左手蓮華・脇侍の馬頭の頭 の上	H	膝より下欠損、三眼	Mitra 1983: Pl. CCCXXIX(B); 佐和1982: 51 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-M 1-10; B-S2a-S2e-P5-1 (重複); 森1998: No.252
6	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠と鬘索、 左手水瓶・蓮華を持ち馬頭 の頭の上	TBH	三眼	Mitra 1983: Pl. CCCXXIV(B); 佐和1982: 口絵9, 9 図; 須富・下泉1994: 口 絵; 佐久間1991-3: B-S2a-S2e-P5-2; 森1998: No.254, 図90~92; 2000: 図12; 2001: 図4-9 (図9・20)
7	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠と鬘索、 左手蓮華・水瓶	TBH	現在左腰より下のみ 残存、三眼	Mitra 1983: Pl. CCCXXIV(C), CCCXXV(A); 佐久間1991-3: B-M1-12; 森 1998: No.255
8	Ratnagiri	現地	右手与願印・数珠と鬘索、 左手蓮華・水瓶	TBH		森2001: 図6 (口絵2)
9	Udayagiri	不明	右手与願印・数珠、左手蓮華・水瓶	TB		佐和1982: 145 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-S2d-M1-4; 森1998: No.256
10	Udayagiri	Patna Mus.	右手与願印・数珠、左手蓮華・蛇の巻き付く三叉戟	TB	光背上部に九尊の仏 坐像、三眼	Saraswati 1977: Pl. 65; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-S2b-M1-P5-1; 森1998: No.257, 図94~96; 2000: 図13; 2001: 図4-11 (図10)
11	Udayagiri	現地	右手与願印・数珠、左手蓮華・水瓶	TBH 未 比定女尊	山岳表現、光背上部 に七尊の仏坐像	佐和1982: 口絵16, 13 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-S2d-M1-3; 森1998: No.258, 図97~101; 2000: 図1~8; 2001: 図4-2~4-5 (図11)
12	Udayagiri	現地	右手与願印・数珠と鬘索、 左手蓮華・水瓶	TB	光背上部に九尊の仏 坐像、三眼	佐和1982: 137 図; 佐久間1991-3: B-S1-S2a-M1-4; 森1998: No.259, 図102~ 104; 2000: 図14; 2001: 図11 (図12)
13	Udayagiri	現地	右手与願印・数珠、左手蓮華・水瓶		光背上部、左前手欠 損	森1998: No.260, 図105; 2000: 図15
14	不明	Patna Mus.	右手与願印・数珠、左手蓮華・水瓶	TH	頭部および両腕欠損	佐和1982: 140 図; 佐久間1991-3: B-S2d-1; 森1998: No.261

\* 管頂尊の略号 T: ターラー B: フリクテラー H: 馬頭



表3 主尊が網索を持つ作例

No.	尊名	出土地	所蔵・所在	臂数	左右	その他の特徴など	出典
1	観音	Kurkihar	Indian Mus., Acc. No. K-4/A25137	6	左手	台座にターラーヒトリクテイ	Saraswati 1977 Pl. 76; 佐久間1993 : 図3 ; 佐久間1991-3 : C-S1-S2a-S2e-3
2	観音	Gaya?	National Mus., New Delhi, No. 5992	6	左手	台座にターラーヒトリクテイ	Saraswati 1977: Pl. 72; 佐久間1991-3 : C-S1-S2a-S2e-5
3	観音	Kurkihar	Patna Mus.	6	左手	台座にターラーヒトリクテイ	Saraswati 1977: Pl. 75; 佐久間1991-3 : C-S1-S2a-S2e-1 (口絵1)
4	観音	Kurkihar	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 5860	6	左手	台座にターラーヒトリクテイ	Mallmann 1948: Pl. IX(b); Huntington 1984: Pl. 115; 佐久間1991-3 : C-S1-S2a-S2e-2
5	観音	不明	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 2076	12	左手	左右にターラー、トリクテイ、馬頭	Banerji 1933: Pl. XXXIV(a); 佐久間1991-3 : E-1
6	観音	Nalanda	Nalanda Mus.	12	左手	左右にターラー、トリクテイ、馬頭、スーチームカ	佐久間1991-3 : E-3 ; 森2001 : 口絵10 (図5)
7	チュンター	Nalanda	National Mus., New Delhi, Acc. No. 47, 34	18	左手		Saraswati 1977: Pl. 140; Huntington 1984: Pl. 169; 森(晋) 1990 : 2.4.13
8	チュンター	Cuttack	Patna Mus. No. 6500	12	左手	光背上部左右に二菩薩、台座左右に二女尊	Saraswati 1977: Pl. 138; 頼富・下泉1984 : p.202 ; 森1998 : No. 429, 図121~124 (図14)
9	大伽藍	Nalanda	National Mus. of Ethnology, Leiden, No. 3083-4	4	左手		Raven & van Kooij 1986: Fig. 54
10	大伽藍	Bhavanipur, Dacca Dr.	Dacca Mus., Acc. No. 66.40	8	左手		Banerji 1933: Pl. XLI(b); Huntington 1984: Pl. 206; 森(晋) 1990 : 2.9.2 ; 森2001 : 口絵14
11	ローリーチャー	Nalanda	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 6267	6	左手	網索を持つ手は欠損	Saraswati 1977: Pl. 126; 森(晋) 1990 : 2.10.10, 図10 (図13)
12	ローリーチャー	Nalanda	Nalanda Mus.	8	左手	網索を持つ手は期刻印を示す	Saraswati 1977: Pls. 124, 125; 森(晋) 1990 : 2.10.12
13	ローリーチャー	Nalanda	Nalanda Mus.	8	左手	網索を持つ手は欠損	Saraswati 1977: Pl. 122; 森(晋) 1990 : 2.10.19
14	ローリーチャー	Nalanda	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 3827/A25131	8	左手	網索を持つ手は欠損	Saraswati 1977: Pl. 120; 森(晋) 1990 : 2.10.4, 図8, 9
15	ローリーチャー	Nalanda	Nalanda Mus.	8	左手	網索を持つ手は期刻印を示す	Saraswati 1977: Pl. 128
16	ローリーチャー	Nalanda	Nalanda Mus.	8	左手	網索を持つ手は期刻印を示す	森(晋) 1990 : 2.10.14
17	ローリーチャー	Bihar Sharif, Patna Dr.	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. A24356	8	左手	網索を持つ手は期刻印を示す	森(晋) 1990 : 2.10.1
18	ローリーチャー	不明	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 4614	8	左手	網索を持つ手は期刻印を示す	Banerji 1933: Pl. XLII(d); Saraswati 1977: Pl. 119; 森(晋) 1990 : 2.10.1

19	ワ-リ-チ-	Nalanda	Indian Mus., Calcutta	8	左手		Banerji 1933: Pl. XLIII(c); Saraswati 1977: Pl. 123; 森(尊) 1990 : 2.10.9
20	ワ-リ-チ-	不明	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 6268	6	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	Banerji 1933: Pl. XLIII(b); 森(尊) 1990 : 2.10.21
21	ワ-リ-チ-	Bihar	不明	6	左手		Huntington 1990: Fig. 12
22	ワ-リ-チ-	Kurkihar	Lucknow Mus., Acc. No. B.282	8	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	頼富・下泉1994 : p.212
23	ワ-リ-チ-	Bihar	National Mus., New Delhi	6	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	森1998 : No.444, 図128-130 ; 2001 : 図2-9
24	ワ-リ-チ-	Pandisari, Faridur Dh., Bengal	Dacca Mus. No. 46	8	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	Saraswati 1977: Pl. 117; Huntington 1984: Pl. 213; 森(尊) 1990 : 2.10.5 ; 森2001 : 口絵15
25	ワ-リ-チ-	Kendrapara	Indian Mus., Calcutta	8	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	頼富・下泉1994 : p.212 ; 森(尊) 1990 : 2.10.3
26	ワ-リ-チ-	Ayodhya	不明	8	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	森(尊) 1990 : 2.10.8
27	ワ-リ-チ-	Kinching	Baripada Mus.	8	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	Sahu 1958: Fig. 71
28	ワ-リ-チ-	Astaranga	不明	8?	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	Sahu 1958: Fig. 74; 森(尊) 1990 : 2.10.16
29	ワ-リ-チ-	Udla	不明	6?	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	Sahu 1958: Fig. 79; 森(尊) 1990 : 2.10.7
30	ワ-リ-チ-	Odisoandeligoda, Singhapur	不明	10	左手	網案の有無は明確には確認できない	Donaldson 1995: Fig. 17
31	ワ-リ-チ-	Ramcandi	不明	8	左手	網案を持つ手は期刻印を示す	Donaldson 1995: Fig. 15
32	ワ-リ-チ- ーリ-ニ- ーラ-	Laliagiri	Indian Mus., Calcutta, Acc. 6956/A24130	4	左手	光背上部左右に一体すつの仏坐像と女尊坐像	Sahu 1958: Fig. 38; 森1991 : 2.7.3.1, 図 8 ; 森1998 : No.530, 図150~153 ; 2001 : 図5-12 (図15)
33	金剛ターラー	Ratnagiri	現地?	8	右手	春敵塔窟中の浮彫	Mitra 1983: Pl. XCVIII(A); 森1991 : 2.7.5.1
34	金剛ターラー	Uttaresvara Temple, Ayodhya	現地?	8	右手		Sahu 1958: Fig.67; 森1991 : 2.7.5.2
35	不動	Vikramasila	Vikramasila Excavation Project	2	左手		頼富・下泉1994 : p.162 ; 森(雅) 1990 : 3.1.2
36	不動	Ratnagiri	現地	2	左手	春敵塔窟中の浮彫	Mitra 1981: Pl. LXXIII(A); 森(雅) 1990 : 3.1.1
37	隆三世	Bodhi Gaya	Mahant's compound	8	左手		Huntington 1984: Pl. 110; 森(雅) 1990 : 3.2.1
38	隆三世	Nalanda, Site 9	Patna Mus., Acc. No. 8457	8	左手		Huntington 1984: Pl. 170; 森(雅) 1990 : 3.2.2
39	隆二世	Nalanda	Nalanda Mus.	不明	左手	腰から下のみ現存	森(雅) 1990 : 3.2.3, 図 1 ; 頼富・下泉1994 : p.166 ; 森2001 : 図7-11, 7-13

40	マハーカー ラ?	Abhaypur, Monghyr Dt., Bihar	Patna Mus.	4	左手	翳笮を持つ手は期剋印を示す	Huntington 1984: Pl. 150
41	ヤマーンタカ	Nalanda	Nalanda Mus.	6	左手	翳笮を持つ手は期剋印を示す Saraswati 1977: Pl. 176; 森(雅) 1990 : 3.4.1, 図 3 ; 頼 富・下泉1994 : p.170	
42	ヤマーンタカ	Ramnagiri	現地博物館	6	左手	翳笮を持つ手は期剋印を示す Mitra 1983: Pl. CCCXXXIII(B); 佐和1982 : 33図 ; 森 (雅) 1990 : 3.4.3 ; 頼富・下泉1994 : p.176	
43	ヤマーンタカ	Ramnagiri	不明	2	左手	翳笮を持つ手は期剋印を示す Mitra 1983: Pl. CCXCV(A); 森(雅) 1990 : 3.4.2	
44	サンダラ	Patharghata, Bhagalpur Dt., Bihar	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. A24365.4552	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ Huntington 1984: Pl. 195; 森(雅) 1990 : 3.6.1	
45	サンダラ	不明	Indian Mus., Calcutta	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ 森(雅) 1990 : 3.6.3, 図 5	
46	サンダラ	不明	British Mus., Acc. No. 1976 -27.1	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ 森(雅) 1990 : 3.6.5	
47	サンダラ	不明	Collection Mr. & Mrs. James W. Alsdorf, Chicago	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ 森(雅) 1990 : 3.6.6	
48	サンダラ	不明	Pan-Asian Collection	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ 森(雅) 1990 : 3.6.4	
49	サンダラ	Ramnagiri	Patna Mus. Acc. No. 6505	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ Mitra 1983: Pl. CCCXXVII(A); 佐和1982 : 75図 ; 森 (雅) 1990 : 3.6.2 ; 頼富・下泉1994 : p. 148 ; 森1998 : No. 539, 図155~157 ; 2001 : 図7-15 (図16)	
50	サンダラ	不明	National Mus., New Delhi	12	左手	翳笮を持つ手に金剛伴も持つ 森(雅) 1990 : 3.6.7 ; 頼富・下泉1994 : p.147	

表4 脇侍が鬚索を持つ作例

No.	主尊の尊名	鬚索を持つ尊	位置	出土地	所蔵・所在	臂数	左右	その他の特徴など	出典
1	仏	忿怒形の男尊	台座の左	Ratnagiri	Patna Mus.	2	左手	右手は剣を持つ	佐和1982：挿図90；森1998：No.47
2	観音	馬頭	左脇侍	Nalanda	Nalanda Mus.	2	左手	右手は剣を持つ	Saraswati 1977：Pl. 61；佐久間1991-3：A-S1-M1-II-8 (図19)
3	観音	馬頭	左脇侍	Ratnagiri	現地	4	左後手	主要な二臂は胸の前で交差	表1作例6に同じ(図20)
4	金剛法	忿怒形の男尊	台座中央	Nalanda	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 3784/A25142	2	左手	右手は剣を振り上げる	Banerji 1933: Pl. IX(a); Saraswati 1977: Pl. 81; 佐久間1991-3: A-M3-II-1; 森2001: 口絵7
5	文殊	ヤマーンソタカ	右脇侍	Udayagiri	遺跡近くの小学校	6?	左手	水牛にまたがる	森1998: No.334, 図112~114; 2001: 図3-11, 3-12
6	弥勒	忿怒形の女尊	左脇侍	Both Gaya	Indian Mus., Calcutta, Acc. No. 3790/A25136	4	左後手	主要な二臂は胸の前で斧の上に置き期型印を示し、右後手は木の枝と鉤を持つ	Saraswati 1977: Pl. 5; 森2001: 図6-1 (図17)
7	金剛手	忿怒形の男尊	左脇侍	Ratnagiri	現地	4	左後手	主要な二臂を胸の前で交差させ、右後手は手のひらを上にする	Saraswati 1977: Pl. 64; Mitra 1981: Pl. CIX (A); 佐和1982: 挿図82, 図10; 森1998: No.354, 図116~118; 2001: 図6-9 (図18)
8	ターラー	忿怒形の女尊	左脇侍	Itkauri, Hazaribagh Dt., Bihar	不明	2	左手	右手は施無畏印	Huntington 1984: Pl. 40; 森1991: 2.8.2.15
9	ターラー	忿怒形の女尊	左脇侍	Both Gaya	Mahant's compound	2	左手	右手は施無畏印	Leoshko 1995: Pl. 6
10	ターラー	忿怒形の女尊	左脇侍	Nalanda?	不明	2	左手	右手は剣を持つ	Huntington1990: Fig. 7
11	ターラー	忿怒形の女尊	左脇侍	Sarnath	Sarnath Mus.	2	左手	右手は斧の上に置く	森1991: 2.8.2.16, 図12~14
12	ターラー	忿怒形の男尊	左脇侍	不明	Indian Mus., Calcutta	2	左手	右手は剣を持つ	森1991: 2.8.2.14, 図11
13	ラーリーチャー	ゾアラリー	中央	Bihar	National Mus.	4	左手	ラーフの上に乗る御者	表3作例23に同じ

(増田大吾編纂)